Wicca・Craft

モチゴメ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｗｉｃｃａ・Ｃｒａｆｔ

【Ｎコード】
Ｎ１３４７Ｘ

【作者名】
モチゴメ

【あらすじ】
モラトリアムにあぐらをかいて、社会的責任もなく、気軽で、自分のとるに足らない些末事こそが世界の問題であるかのように語り明かせる。
ああ、なんということか。そんな高校生の放課後。

1to7

放課後、生徒会室はオレンジ色に染まる。
夕日、斜陽。傾いた太陽。

当然のことながら、部活動もせず、椅子の上にあぐらを書いて、欠伸をする。

長々とした校長の朝礼から始まった月曜日。その放課後。

とはいえ、これこそが日常。なにか変わるでもなく、なにか起きるでもなく。
青春と情熱を浪費する毎日のただの一日。
今日も今日とて、そんな日の筈だった。
そう。そのはずだった。

1．Ｓｈｅ　ｉｓ　ａ　ｗｉｔｃｈ．

「肴菜くん」

「なんですか、芒月先輩」

「私が魔女だって言ったら、驚くかな？」

「いいえ」

「え？」

「え？」

「ごめん、なんでもない」

彼女は。芒月小梅（ササヅキコウメ）は。

笑いながら。菊盃肴菜（キクサカサカナ）に。冗談を言った。

それを少なくとも肴菜は冗談だと思った。

よくわからん。

何を。何故こんな事を言ってるのか。全く。

それが、ファーストインプレッション。

2．Ａｓ　ｙｏｕ　ｃａｎ　ｓｅｅ．

「えっと、その顔は、もしかして信じてもらえてない、かな？」

「はい。全く。だいたいすでに一部界隈では魔女呼ばわりでしょうが」

氷の魔女（アイシクルウィッチ）とか永久凍土（エターナルフォースブリザード）の女王とか、厨二病ですか。

「だから信じるもクソもありませんよ」

当たり前。

至極当然にして単純明快なまでに明示している。

それが。この表情。

変なこと言ってるやつを目の前にして変な顔をしないわけがない。

これが普通なのだ。

そして、彼女の眉尻がさがる。

「……えっと、ずっと見つめられると少し恥ずかしいんだけど……」

は？

「あ、あのね、いくら魔女でも照れるんだよ？」

知りませんよそんな事。

３．Ａｎｄ　ｓｏ．

「失礼ながら、芒月先輩。一言いいですか？」

「あ、うん。何かな？　先輩何でも答えちゃうぞ。あ、え、えっちなの以外、だけど……」

「……もういいから帰ってください。放課後ですし」

めんどくせえええええええええ。

4．ｗｈｅｒｅ　ｏｎ　ｅａｒｔｈ？

「具体的にどういうことなんですか」

「えっと……どう言えばいいのかな？」

知りませんて。本当に、まったく、これっポッチも。

「それを知って何になるんです？」

「いや、特に無いんだけど……えっと……怖いかな？」

「いいえ全く」

「えと、本当に？」

「はい」

幽霊とか信じていないし。

「そ、そっか……えへへ」

……一一九番したら、魔女狩りしてるかな？

5．Objects changes．

「By the way，一つ聞いていいかな？？」

「本を読んでいます。今」

見てわからないものか？　あと、なぜ英語？

「それはわかるんだけど、逆さま、だよ？」

……

「なんですか？」

「あの、その……私のこと、どう、思う？」

うわぁ。

面倒くさい。

「君は私のこと、どう思ってる？」

「先輩です、芒月小梅。それ以下でもそれ以上でもないです。」

ＳＵＳＵＤＵＫＩ、って言い難い。

「生徒会書記で成績優秀、生徒会長以上の支持率を誇る『氷の王女（クールビューティー）』、生徒会の影の支配者にして、現生徒会の高支持率の原因。そのせいで会長はジリ貧気味かつ傀儡（かいらい）呼ばわり。でも実はかなりのドジっ子で、二重人格。そんな感じの認識です」

「人格は一人だよ……うぅ……」

そんな格好しないで下さい。ウルウルもしないで下さい。写メって回しますよ。

「じ、じゃあ、どう想ってる？」

漢字って大事だね。それぞれに意味がある。

「……めんどくさい」

めんどくせー。

6．Don't bully me.

「ひどいよ、意地悪だよ」

「僕は嘘をつけないので」

本音です。

「公約掲げて生徒会長になったの、肴菜君だよ？」

貴女が辞退したから繰り上げ当選したんですよ、有効得票数の九割以上貴女の票だし。

あれ、今それ関係なくない？

「嘘はダメなんだよ？」

だから本音だって。

「嘘は、ダメなんだよ？」

本当に心から本音です。

「ダメなんだよ？」

えっと、怖くないですからね。

てーか、貴女のＣｏｏｌっぷりこそウソでしょうに。
そのギャップはこの部屋限定ってのもキツイ。
ギャップ萌え独占ですか……

「嘘だよ、ね？」

あーもーはいはい嘘ですよ。小梅たん萌えー。可愛い可愛いチョー可愛い。
世界で一番可愛いよ。

ソンナニオレヲイジメナイデクダサイ。

７．Ｃｏｏｌ　ｂｅａｕｔｙ.

「まったく、君は身持ちが堅いな。いや、それが悪いわけじゃないんだが」

そしてクールな、いきなりいつもの彼女。
完全無欠のクールビューティー。

「何ですか、いきなり」

「ギャップ萌え、とか感じない、かな？」

「いえ、まったく」

「おや、そうなのかい？　男子なのに淡白だね」

かんらかんら、彼女は笑う。しかし、いつもの彼女はまるで「大人」だ。

「……それともやはり、色気より食い気かな？」

ああ、もう、首をかしげないでください。ふくみ笑みを浮かべないでください。加えて腕を組まないでください。

「ああでも、色気がよかったら言ってね？その時は……えと、見せて、欲しい？」

そう言って。

平均よりも短めのスカートの先をちょいっと摘まんで、あげて見せた。

ぎりぎり見えない程度の、ほんの少しだけ。

ニーソックスの太もも。その、プクッと膨らんだ所。

肌色と、それが仄かに透ける黒。

「れ、れも、えっちなのは行けないと思う、よ？」

興味ない。

とは言わないけれど、顔真っ赤にしてまでたくし上げかけないでください。てか噛むなよ。余計に赤いんですけど。

だあああ、だからいいから降ろせっての！！！

芒月小梅は、見ての通りの美少女で。
スタイルもいい。好みかどうかは明言しないけれど。
その分、高嶺の花。性格もキツめで、友だちが少ない。
はず。

菊盃肴菜は、見た目こそ普通。だと思う。

染めそこねた髪に、表情の薄い顔。（ダーティーブロンド）

素行は不良……だと思われている、らしい。

そんな二人の放課後。

8to11

認知し許容することとは、自らのものとして消化すること。
世界観なんて、自分の見える主観の中にしかない。
だから、世界を受けいれるなんて、実は簡単なんだと彼女言った。

栄養が回っていないと、やっぱり脳みそが動かない。だから、こんな中学二年生みたいなことを思い出したりするんだろう。

昼飯、食いそこねた。しかも貫徹でゲームしてたから、眠い。

オレンジ色の生徒会室で、腕を組んでウトウトしていたら、彼女がまた、やってきた。

いつもよりもかなり遅い。しかも私服だった。

8．Just for you.

「おはよう、肴菜君。今日はなんだかアンニュイな顔をしているね。お昼でも食べそこねたのかな？　ゲームで寝不足かな？」

もう放課後です、小梅さん。というか、大人なモードですね。

「なぜ知っている、みたいな顔をしているね」
心を読めるのか、自他称魔女（コウメ・ル・フェイ）め。
「肴菜君を観察しているんだから、それくらいわかるさ」
このストーカー……いや、魔女め……
「それで、どうするの？」
「さっさと帰って、ごはんを食べることにします」
家では一人ですけどね。
「一人で？」
それはまあ、両親共働きの鍵っ子ですから。チンして出来合いの物をご飯と一緒に。
「寂しいね？」
まあ、それはね……ていうか、言わないでください。もう慣れてきたんですから。
「それでね、君が一人で寂しいと思って……あの、その、こ、これをね、急いで作ってきたんだけど……一緒にどうかな？」
白地に黒ウサギ柄の、少し派手な布。少し大きめの包み。

そんな、お弁当だった。

9．instant．

「……ものすごく、手が込んでますね」

「そ、そうかな？」

さすが魔女。二段になったお弁当箱の中身は、どれも自分がいつも食べているようなものとは全く違った。
とても手の込んでいるようで、とても美味しそうで。
つまり、生鮮食品。
コンビニ弁当や冷凍食品、栄養ドリンク、携帯食品、惣菜パンで生活している俺には馴染みの薄いものだった。

さすがにこれは

「……ありがとうございます」

「え、えへへ」

終業から一時間しかたってないのに、本当に。
よく作れたな。

「で、でもね、半分以上は前作って冷凍してたものを解凍したやつなんだよ？」

「……Ｗｈａｔｓ？」

まあ流石に魔女であっても、短時間でこんなお弁当、一からは作れないか。
でも美味しそうだから良いか。

「あ、愛情こもってるかりゃ！」

そんなに赤くなるなら言わないでください。というか噛むなっての。

１０．Ｄｅｌｉｃｉｏｕｓ？

「とにかく、はい、あ、あーん」

そう言って彼女は俺の近くにやってくる。
差し出された箸の先には、いい匂いの唐揚げが。
……これをこのまま食べたら、負けの気がする。

「自分で食べられます」

「嫌かい？」

そこで大人モードですか。切り替えのスイッチは何処にあるんですか、全く。

「嫌です」

「そっか、いやか……」

そういった彼女は、口を軽く開けて俺の方を向いていた。

「あ、あーん」

目をつぶって、ホンノリ頬を赤らめて。

「いただきます」

だから俺はそれを無視して食べ始めた。

すごく、美味しかった。

１１．Ｂｏｎ　ａｐｅｔｉｔ．

もう夜の帳も降りかけてている。風も、涼しい。

「ご馳走様でした」

「あ、お、お粗末さまでした」

量も質も、いつもの食事よりずっと美味しかった。
何気に、魔法瓶に味噌汁まで入れてきてくれていた。これは、出汁からきちんと作っていたそうで。
……正直、おふくろのより美味かった。

「えと美味しかった？」
ニッコリと笑う。

「はい、とても」

「あ、え、ありがとう

「どういたしまして」

彼女は、なにか納得いかない用で。
ふむ。事実美味しかったし満腹感の気持いい余韻を味わえている。
ううむ。
俺は非常に満足なのに。

「えと、珍しく素直だね、肴菜君」

素直なのは珍しく無いでしょうが。
俺は嘘はつきませんよ、少なくとも意識的には。

「一言余計です」

「あう」

ずびし。チョップをした。

その日、寝たのはまた深夜だった。
それでも、夜食を食べなかったのは久しぶりだ。
彼女の弁当は何時もの食事と違って腹持ちがよく。夜まで気持ちが良かった。

また食べたいと思ってしまって、少し顔が赤くなった。

Ｗｈｙ？

とにかく、お礼ということで。
俺は彼女に缶コーヒーを買っていった。

12to16

欠伸をかみ殺しながらコーヒー(ねむけざまし)を啜って筆をすすめる。
三角関数を合成し、二重根号を外し、分数関数を積分し、増減表を書いてグラフを作る。
つまりは数学。いや、数が苦。もう、ユークリッドもソクラテスも憎たらしくて仕方ない。

オレンジ色の生徒会室で、俺は億千万にも及ぶ呪詛の言葉を並べ立てながら赤点の補填課題を解いていく。
いや、間違い。正確に言えば……いけない。口癖移ってしまった。
とにかく、解けなくても数字やα、β、∫、Σ、それにC(せきぶんていすう)を並べていく。

わからん。まったく。オレンジ色の生徒会室で苦悩し唸っていると、彼女がトコトコとやってきた。

12. Homework.

「コーヒー、ありがとうね」

「いえ。あのお弁当に比べれば。あんなもので申し訳ないです。ま」

「ま？」

「まー！」

視線を向けずに、言葉だけでそういう。お礼を返す態度じゃないって？

いいじゃないか、別に。

言いそうになって、恥ずかしいとかそういうことじゃない。

「ま、まー！　肴菜君、数学苦手なのかい？」

「ええ。これが嫌で生物専攻にしたんですから」

得意科目は英語と生物ですから。ああ、掛け声合わせてくれてありがとうございます。

「え、えと、保健体育（そういうえっちなこと）の性教育は、生物には入らないと思う、よ？」

「やかましいんで黙っていてください」

健全な青少年だからって、そんな方向には暴発しません。

「あぅ」

だいたい物理選択がそんなところにかぎって興味持ってんじゃねえ。

「……た、正しい知識は必要だと思います！」

そう言って。　俺の下半身をチラ見して。

「……」

顔真っ赤にしてそんな事言わないでください。ソッチの方で貴方には何も求めていないんで。

つーかただの変態じゃねえか！！

13．Ｔｈｏｕｇｈｔｌｅｓｓ．

「つーかただの変態じゃねえか……」

思わず口をついて、　さっきの思考が漏れて出る。

呟きほどの声だけれど、魔女の地獄耳には捉えられたようで。

「へ、変態じゃないよ！」

覚めることなく、顔真っ赤っ赤。

「さっきの言動の端々から変態以外の答えがでないんですが」

この間のスカートとか、思い返すと、意外と大胆な発言も多い。

最近は性的にオープンな女性が多いと聞くけれど……

「まさか生徒会室以外でもそんな言動なんじゃないかと思うと……はぁ」

「ち、違うよっ！……看菜君に対してだけだよ、こんなふうに

言えるのは」

なぜ、そうなる。

なぜ、うつむく。

14．Naive．

「……」

「……」

アレから時計の長針が少し進んだ。多少、いやかなり気まずい。

芒月先輩は何も話さず、うつむいたまま。

俺はどうにも手が進まず。

「……あの」

「……」

「……ええと、先輩？」

「……」

「……ぐすん」

口で言うな、と言いたいけれど。でも、やはり、これは。

ああ、間違いない。責められている。
失言は……ああ、まあ、有るといえば、在る。
「すみません、失言でした」
「……傷ついた」
「悪かったです」
「私そんな女の子じゃないよ」
「わかってます」
考えてみれば、彼女はここ以外では氷の王女（クールビューティー）なのだった。
そんなこと、他で言っているわけがない。
「ほんとに？」
「はい」
「じゃあ……一つお願いを聞いてくれるかな？」
そういった彼女は、まるで泣きそうな目でこっちを見て。

15．wish．

「小梅」

「はい？」

そう言った。なぜ自分お名前をおっしゃるのですか、先輩。

「今度から、小梅って」

「呼べと？」

「呼んでくれてら、許してあげる」

なんだその笑顔。まさか……謀ったな、シ〇ア！！

「はぁ……」

ため息をついて、俺は自分の勉強机の下に視線を向けた。
ボケボケの天然さんでも、この人は魔女だということを忘れてた。
かなりの成績優秀者だということを忘れていた。
全国有数の、超高校級の頭脳の持ち主だったんだ。
間違いなく。
しかも天才型ではなく、秀才型の。

「これ以上遅れると死活問題ですので。もしまた似たようなことをしたら千切りますからね、小梅……先輩」

「……先輩はいらないよ？」

こういう線引きなんです。一応、けじめなんです。

１６．ｈｅｌｐ　ｍｅ．

「……そんなこと言ってたら、本当に間に合わなさそうじゃないですかこのやろう」

そう言って、俺はまたペンを走らせる。そんな俺の横にやってきて。

「手伝おう、か？」

ニッコリと笑う。久々に彼女が俺に対して優位なポジションを得たからだろう。

無論俺ではオトナモードには敵わないけれど、ドジっ子小梅たんぺろぺろには勝てるのだ。一応。

だから久々。

では、スーパー言い訳タイム。

ああ、もちろん負けた気がするとも。このドジっ子に教えを請うて、教えてもらうのは。

でも、提出期限は明日の昼まで。しかも、家に帰ったら攻略途中のゲームをこなさなくちゃならない。じゃあ、本当に、仕方ないじゃないか。

「お願いします」

すっげえ驚いてる。
悪かったな。本当に苦手なんだ。数学なんて死んでしまえ。
ゲームのアルゴリズムくらいなら暗算でできるんだけれど。

「……えっと、じゃあ、小う」

「じゃあ、ここからお願いします」

「あうう……意地悪だよ、肴菜君」

といいつつも、彼女は自分の筆箱を取り出して俺の隣りに座った。
少しイイ匂いがした、などとは微塵も思っていない。本当に。全く。
これっポッチも。

意地悪だとか、酷いだとか、散々に悪態をつきながらも。
彼女は懇切丁寧に解説してくれた。時折大人モードになって揶揄ってきたりと何だかんだで飽きずに楽しくやれた。俺が数学を楽しむ日が来るなんて、ありえないと思っていたから。
目からウロコだった。
答えを直接教えたりしないのは、俺の学力向上を思ってくれてのことだろう。

オレンジ色が遠く黒紫に変わり始めた頃、やっと終わった宿題を鞄にしまい込んで。
途中まで彼女を送って、家に帰った。
その道中の終始、俺の右手袖を握っていたのは、俺が両手をポケットに突っ込んだままだったからだろう。

家のすぐ近くの交差点。横断歩道越しに住宅地の自宅の辺りをぼーっと眺めていたら。

そういえば学校の外での彼女のことを何も知らないことに気がついた。

Call to M

『驚いたね。君からかかってくるなんて初めてじゃないかな？　いやはや、とても驚いたよ。最後に電話したのもずっと前だったからね。半年かそこらだよね？　ああ、ついさっきまで『あっち』で会っていたのは、確かにそうなんなだけれどね。でもね、『ワトキンス』。我が左腕、無双の杖。僕はヴォイスチャットよりこっちのほうが好きなんだよ。ほら、ロールとかヴォイスチェンジャー無しのほうがいいじゃない、放す時は。まあ、これは僕の個人的な極限れた価値観ではあるんだけれどね。君とおんなじだと嬉しいな。ほら、国の違いは文化の違い、文化の違いは価値観の違いじゃない？　『湯水のように…』って言葉もそこと中東の、ほら、枢軸産地帯の辺りだと意味が違うでしょう？　そんな感じなんだよ。ああ、いけないいけない。また喩え話で時間が過ぎてしまうところだった。朝も早い学生さんには、その忙しい日常においてもよく寝よく食べ、そして大いに学んでほしいからね。にほんの高校生は大変なんだろう？　僕にはもう過ぎ去った頃の話だから、思い返せば嬉しくもあり恥ずかしくもあり、いやはや、いやはや。ああ、ところで我が忠臣ワトキンス。……ワトキンス？　ワトキンス！？　まさか、君！　また受話器を離して聞き流しているね！？　酷い、酷いよ君ぃ！　この前もそうだったじゃないか！　いいよ、それなら君が聞いている何かより大きな声で高らかに歌うまでだ！　ミーリさんのヒッツッジ、ヒッツッジ、ヒッツッジ！　ミーリさ』

「やかましい！　歌うな、というかハンドルネームで呼ぶな！」

『んん、やっぱりリアルだとキャラ変わるねぇ？　そうは言うがね、こっちは午前五時前でしかも船の上、高度数千フィートを航行中なんだよ？　ワンコールでとったことを感謝して欲しいんだけれど？』

「それが歌うことにどう繋がるのか教えてくれ」

『もちろん特にはつながらないよ？　ああ、そういえば。メリーさんの羊といえば、白いお髭（ホワイトドール）の機械人形のアニメの主人公が歌っていたよね？　僕はアレが結構好きでね。　一応シリーズは全て見えいるんだけれど、アレが最高傑作だと思うよ。次点で×（ペケ）か神かな。ああ、揚げ物は嫌いだよ。見る気がしない』

「ええい、そっちはどうでもいい」

『あらら。まあいい、とにかく本題に入ろうか。Ｗｈａｔ　ｂｒｏｕｇｈｔ　ｙｏｕ　ｔｏ　ｃａｌｌ　ｍｅ　ｉｎ　ｔｈｉｓ　ｌａｔｅ　ａｔ　ｎｉｇｈｔ？（こんなおそくにどうしたの）」

「お」

「お？」

「女の子へ、お、贈り物の、まあ、そんな感じのものの相談がしたくてな」

『……』

「おい」

『いや、すまない。君がそんな事を言うとは思わなかった。うん。驚いたよ。戦艦（おんなのこ）が、それも単艦（ひとり）で外宇宙宙域（エッジワース・カイパーベルとんるいのてき）の宇宙怪獣を倒しきった時よりも驚いたよ』

「そんなにか」

『そんなにさ。しかし、それなら我が右腕にして君の相方、忠義の剣『アルドレッド』に相談したらよかったんじゃないか？　少なくとも僕より君に年が近くて、しかも彼女は女性だろう？僕と違って』

「それはまあ、そうなんだが、なんというか、その」

『歯切れが悪いね。まあ、照れくさいってことなんだろうけれど』

「分かってんじゃねえか！」

『当たり前じゃないか。こう見えて僕はもう大人なんだし。それに君は僕の仲間の一人なんだし』

「よくそんなストレートに言えるな」

『それが僕の僕所以だよ』

「……まあ、納得しておいてやる」

『ありがとう。まあ、それはそれとして、どういう意味合いでのプレゼントなんだい？　愛の告白？　エンゲージ？　プロポーズ？』

「な！　アホか！　……そういうものじゃない。お礼だ。勉強を教えてもらっただけだし、その、御礼だ御礼」

『御札？』

「次活字ボケをしたら電話を切って着拒、ギルドを抜けてＧＭにギ

ルドの裏帳簿送るからな」

『ごめんごめん。まあ、なるほど。そういう事ならあんまり込んだ物じゃない方がイイね』

「だから分からなくってな」

『ふうむ……なあ、何がいいかな、梅桃(ゆすら)？　ああ、うん……ああ、なるほど。そういうのもありかな。なるほどなるほど。そういうのはいいかもね。ありがとう』

「梅桃？」

『娘。僕のところの長女』

「はあ！？　む、娘！？　しかも長女って」

『そ。二人いるよ。今年で十八歳の長女と十四歳になる次女あいるよ。ああ、まあ、それはともかく。それでね今聞いたんだけれど、君がなにか作っていってはどうかな？　クッキーとかそういうの。男の子がそういうのって僕的にはキュンキュンするけれど』

「……なるほど」

『じゃあ、頑張ってね。僕も君の手作りって食べてみたいけれど、まあ、それはまた今度の機会に。その時は僕のために作ってね？』

「藁人形を？」

『言ってしまったら、呪詛返(あなふたつ)しなんじゃないかな？』

「……こちらからかけておいて何だが、もう寝ろ」

『酷いなぁ、もう。まあでも、僕も明日、いや、今日か。とにかく早いしね。二時間後には会議始まっちゃうもの。それじゃあ、オヤスミ』

「ああ、おやすみ。ああ、あと」

『ん？　なぁに？』

「ありがとう」

『いいえいいえ。じゃあ、オヤスミのキ』

ガチャン！

C 1to5

別に、あの弁当とか、課題とかが転機だったというわけじゃない。
ぼ…俺はそれなりに先輩に世話になってきた。生徒会の雑務以外にも、主に暇つぶしに。

やけに南九州の名前のついたキャラクターが戦いまくってる生徒会漫画や、一存とか円卓のようなライトノベルじゃあるまいし。

それに俺たちのようにメンバーは高校生だ。
生徒会に与えられている仕事なんて、殆どが「後片付け」とかそういうこと。

例を挙げるなら、部活の予算作成とか。高校生に大金いじらせるなよ。
総生徒数五千人以上。ともなって、総部活数も三桁在るとかないとか。
そんなものの予算編成なんて出来るはずがない。
目は通すけれど「一応（たてまえ）」でやることだし。

まして生徒間のいざこざなんて対処していられない。

はあ。

でも一応のレベルでは、それなりの量の書類仕事があるわけで。
審議して、判子を押すのもあの量だと本当なら大変なんだろう、と思う。
なんで「思う」なのかといえば、実は先輩がかなりの量を簡略化してまとめ上げ、大体十分の一ぐらいにしてくれているから。

ほんと、俺の下なんかで働く意味があるんだろうか、この人。
兎に角。会長って、なってみても良いこと無いんだよ。本当に。
そんな事を思いながら、オレンジ色に染まった長い廊下を歩いて行く。
生徒会室がこんなに奥まったところにある意味って……
なんて思っていると、ふと思い出す。
ああ、でも。
この生徒会には唯一、漫画みたいな所があったんだった。
それが「執行部」の存在だった。

1．So called”Cherry Blossom”

甲高い風切音を唸らせて、ゴム底のはずの上履きから火花を散らして。
後頭部に飛びついてきた。
「菊盃ァ肴菜ァァァアああああああああああああああああああああ

ああああああああああああ……スゥ―――ッ、ああ！！」

「『さん』をつけろよデコスケ野郎ぉぉおお！」

息継ぎまでして言いたいか。そして離れろ。

「アタシデコ出てねーですし！　剥げてねーですし！　フッサフサっす！」

それは見ればわかる。生まれてこの方切ったことがないのかと問いたいぐらいに伸び撥ねた髪を、ゴムやピンで無理やり止めている。

先輩を赤面魔女とするならば、こいつは差詰め脳筋女勇者。

会員数一人の生徒会執行部。その執行部長、桜幕千愛里（サクラマチエリ）は、馬鹿だった。

2. Shout it LOUD!

「千愛里」

「Sir、なんでありますかあああああ！」

「ちょっと静かにしような？」

なんなのだろうか。このハイテンションは。

その成分を二ミリグラムでいいから分けて欲しい。飲む気はないが。

「ダメっすかね！？」

「駄目だ」

「でも、語尾に—！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！（エクスクラメーションマーク）ないと落ち着かないんすよねー！」

ケラケラという形容詞がこれほど似合う人間もいないだろう。

明るい顔に破顔一笑（まんめんのえみ）。

そんな事は知らないって。でも話しにくいだろうなとは思った。

3. What's wrong?

「そういえば浮かない顔っすね、さかなさん！」

「先輩とちゃんと呼びなさい」

「先輩！」

「よろしい」

「で、何かあったんすか！？」

「ああ、まあ、なんというか」

「珍しく歯切れ悪いっすね！？」

「ああ」

そういえば、こいつも女だったっけ。一応。

一般的な概念から考えてかけ離れていそうでも。

ならば、何が欲しいか聞いてみるのも一興かもしれないじゃない。

なにせ、わたす相手も普通じゃないんだから。

「なあ、俺がなにか手作りの物をプレゼントするとして、お前なら何が欲しい？」

そして彼女が一旦フリーズした。可笑しい。この脳筋が、勉強以外でフリーズするとは。

そして千愛里は大きく息を吸って。

「ほああああああああああああああああああああああああああああ

ああ

んでも嬉しいっす！　練り消しから石油採掘基地まで、何であろうと！　でも食べ物だとよけいに嬉しいっす！」

そこまでは出来てたまるか。

「そこまで酷いものはやらないし、そこまでのすごいものも出来ないが……食い物か。クッキーとか、か？」

無難かつ、作りやすい選択。レシピさえ見てれば、失敗しないだろうし。

「まさか作ってくれるんすか！？」

「欲しいのか？」

「無論（いうまでもなく）！」

というわけで。

先輩にお礼をわたすために、まず千愛里に何か作るというプロセスが必要となったわけだ。

ああ、蛇足だった。

5．Ｂｕｔ　ｗｈｙ？

「しっかし、どういう風の吹き回しなんすか！？」

「何がだ？」

ここまでのやり取りに、疑問点があったとすれば。
それは千愛里のエクスクラメーションマークへの執着ぐらいだ。

ほかに、あるだろうか？

「いきなりプレゼントだなんて！」

「ああ、実は日頃のお礼にと思ってな。先輩に何かあげようかと思ってな」

「え」

一瞬、千愛里が固まったのは何だったのか。
正直それは分からなかったけれど、一瞬をおいて復活した彼女には尋ねられなかった。
生徒会室までの廊下も残り短い。その間に、俺は千愛里に何が食べたいのか、どんな味が好きかを聞いた。
彼女は生徒会室に決して入らないから。

「しっとり焼いたシナモンシュガー味のハードクッキー」

明日からレシピを頼りに作ってみよう。
そんな事を思いながら帰宅路を行く。
その途中で、また千愛里に抱きつかれた。

17to20

仕方ないじゃないか。眠いんだから。
ソファの上で、足を投げ放して、ゴロゴロとしている。
あれからもう何日目だっけ……一〇〇時間は絶対起きてるはず。
コーヒーもモカも、眠眠打破さえも効かない。眠い。眠すぎる。
仕方ないじゃないか。失敗するんだから。なかなか難しいんだよ、こういうのは。
でもなんとか完成したし、いいじゃないか。
オレンジ色の、遮光（ブラインド）カーテン越しの揺光は心地いいぐらいに薄暗く。
うつらうつらと、意識が、飛ん、で、あ、ああ……

17．Bed－bugs bite．

何といえば……ああ、ほら、アレ。目の前にシャーペンとか、そういう尖ったものが眉間に近付いてきた時のような感じ。
目頭がジンジンする。
あれ、すごく苦手なんだよね。
後頭部にもなんか変な感じ。今気付いたけれど。
と、ふと目を開ける。
「Hal（とまれ）t」

「あう」

小梅先輩が、真っ赤な顔が目の前にあった。
タコ唇で、震えながら、意を決したかのように。
それに人差し指を押し当てて、とりあえず押し返した。

「なんのつもりですか？」

「えっと、その……約得かな、って」

なんのやねーん。

18．Ｌａｐ　ｐｉｌｌｏｗ．

彼女の胸元越しに顔が見える。俺は真上を向いている。
知ってる天井だ。見知った顔だ。知ってる、そして落ち着く匂いだ。
でも。

「なんですか、これは？」

「えっと、膝枕？」

そういえば、そうか。
ほのかに温いし、弾力があるし。だいたいそれは分かるってば。ヴぁ。

……ＷＨＡＴ？

「えっと、イヤかな？」

「いえ、気持ちはいいですが、何故ですか？」

「約得かなって」

なんのやねーん。

「なんの約得なんですか？」

「えと、生徒会書記、いや、成績優秀かつ教職員からの信頼厚い優等生のかな？」

スイッチ入ったー！
目付きとか雰囲気が変わるんで、いきなりはやめて欲しい。
本当に、別人みたいに。

凛々しい口調と顔つきで、小梅先輩は視線を外す。まっすぐと前を向いて。

「私はね、自分で言うのも何だけれど、品行方正にしていてよかったと思っているよ。何せ」

そう言って彼女は、再び俺の顔を覗き込む。切れ長の目が、すっと

通った鼻梁が、近い。
綺麗な髪がオレンジ色の光を遮って、俺の顔にも垂れ下がる。
擽ったい。顔も、気持ちも。
「君とこうやって放課後が過ごせるから。これ以上の役得はない、よ？」
目の前で、クールビューティーが、照れていた。
「な、あ、その」
言葉がでない。呂律が回らない。舌先がしびれてる。
そんな風に、そんな直線（ストレート）に。
何を言ってるんだ。本当に何を、何？
「えっと、照れるね、こういうの」
「俺のほうが照れます」
「え？」
「照れますよ」
「あ、えっと……照れてくれるんだ。えへへ」
何をそんなに。嬉しそうに、喜んでくれるんだろうか。

１９．Ｈｅｒ　ｅｍｏｌｕｍｅｎｔ．

ああ、ムカつく。そういう風に、手駒に取られるのは。
この人に。この調子に。

よし、ペースを崩してやろう。
役得ってことで納得してくれるかもしれない。

正直、かなり日にちが空いていた。それだからか、タイミングが掴めなかったってのは本当だ。
だからとても丁度いい。よし。渡してしまおう。

でも、起きたくはなかったから。

「小梅先輩、俺のバッグのなかのヤツ、取ってもらえますか？」
「えっと、これかな？」

彼女に少し、手を伸ばしてもらった。
前傾したからか。彼女の胸が、近付いてくる。

これが、俺の役得、だろうか。

２０．ｓｏ．

「えっと、コレかな？」

「それです」

黄色い巾着袋に包まれた、小さな何か。
実はココに来るまで、執行部室で千愛里（ちえり）に手伝ってもらって包装したものだ。
それを持って元の体勢に戻る。
首を傾げて覗き込んできたその目に、俺の顔が映る。

「これ、何かな？」

”Ｉｔ' ｓ　ａ　ｐｒｅｓｅｎｔ．Ｍａｄｅ　ｊｕｓｔ　ｆｏｒ　ｙｏｕ”

「ゑ？」

そうして彼女はフリーズする。瞬きまで止まってしまって。
えええええええええええ！？
あと、先輩。「わ行のえ」って、字面でしか分からないいんですからやめてください。

「えっと、えっと、あの、あ、あが、ありがとう、ございます」

「いえいえ。というか、そんなに驚かないでください」

「えと、中身を聞いて、も？」

「クッキーですよ。自信作です」

「あ、ありがとう」

終始にやけ笑いを顔中に張り付かせたまま、事務仕事をする彼女。
困ってしまったのは、彼女が起き上がらせてくれなかったことで。

右手でペンを走らせて、左手で俺の髪を撫でる。そんな彼女。
こんな状態で、寝るわけにもいかず。
心地いいのに。
こんな状態で、先に帰りたいといえず。
寝不足なのに。

彼女が拘束から開放してくれたのは、事務仕事が片付いた後。
オレンジ色のかけらもなく真っ暗な空に、三日月の登った頃だった。

夜の帰り道。それはことさら寒くって、暗くって。
小梅先輩が握ってきた右手だけが、妙に熱くて心地良かった。

C 6to9

地響きか、地鳴りか。まったく、よくもまあ廊下が踏み抜かれないものだ。もしかしたら、高速道路の高架下の方が静かなんじゃないかってくらい。

そんなレベルの騒音を掻き立てて走れる人物は、俺の少ない友好関係の中では、知りうる限り一人しかいない。

獅々髪の魔弾（ライオンズ・シックル）、黄昏時の導火線（サイケデリックスパークプラグ）、音速の魔女（ソニッカ・マズルカ）、桜色旋風（さくらふぶき）、桜幕千愛里（チェリーブロッサム）。

これが「自称」なのだから、恐らくは真性のものなのだろう。

それなら、俺もそれに習って。

黄昏色に染まった回廊。遥光の揺れる中を、魔女が走る。

それまるで……まるで……ああ、無理！　俺には無理！

先輩もこないので、もう帰ろうと廊下を歩く中。

オレンジ色に染まった長い渡り廊下で背筋に冷たいものを感じて、脇腹の痛みに打ちひしがれていると。

背中にすごい衝撃を感じた。

6．Ｈｅｒ　ｓｔｙｌｅ．

「肴菜センパァァあああああーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーィッッッ！」

両側から回される、カーディガンの袖と細い指。ほんのりと、冷たくていい匂いがする。

右耳に当たる吐息と、黄色い声。「比較的薄め」だが、間違いなく感じられる感触。

抱きつかれていると気がついたのは、

「重いんだよこの野郎！」

「アタシ重くねーですし！　野郎じゃねーですし！　ピッチピチの女の子っす！」

その腕を支点にプランプランと揺れる揺れる。背中でこすれて、「比較的薄め」の「もの」が形を変える。

「実際、背中でわかるっしょ！？」

「薄い」

「うわあ、マジショックっす！　薄いほうがステータスなんすよ！？　希少価値なんすよ！？」

言う割には、落胆という感じでも、ましてやショックという感じでもなく。

「まあ、大きい方が気持ちいいみたいっすけどね、殿方は」
彼女はかんらかんらと笑っていた。

7．Ｉ　ｄｏｎｔ　ｃａｒｅ．

「そういうのは俺が普通考えるもんだろう」
お前が考えることじゃあ、ないだろう。オッサンじゃあるまいに。
殿方じゃないしな、お前は。

「肴菜先輩はどっちが好きなんすか！？」

「大好きだね、大きいの」

『大きいの』を強調してみる。本当のことを言うと、こだわりはない。
それに、正直千愛里のスタイルが悪いわけじゃない。
見た感じは、普通よりずっといい。

だが、「比較的薄め」。間違いなく、「比べてみると薄い」。
膝枕の位置から見ていたのと、背中の感触から比べるのもどうかと思うけど。
だが、こればっかりは間違いないはず。

「ふむ、大きいの……っすか！」

しかし、アイツはニヤリと笑う。回された腕に、もっと力がこもる。

「小さいのもいいと思うんすけどね、感度とか！」

そりゃあ、負け惜しみってやつだ。ってか、女の子が感度とか言うな。

8．Ｓｍａｌｌ ｂｕｔ，……．

「小さい方が、感触はとても気持ちいいらしいっすよ？」

どこ情報だよそれは。笑って言うが、それどころじゃない。

コイツの事だから、何が情報源かわかったもんじゃない。

下手をすると「センパイの机の引き出しの二重底の、ガソリン敷かれた上にビニールに包まれてた本に書いてあったんすけど！？」ほああああああああああああああああああああああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！これは罠だ！

！！！！！！

「うわ！？　なんすか、いきなり大声で！？」

「どうやって開けた！？」

「素手でガバーっ、とっす！　ホンの少し熱かったっす！」

「まさか健全（クライム）な高校生のエロ本（カタリスト）をゴム手袋（オラトリオ）なしで！？」

「というわけで、触ってみます！？」

「触るかよ」

どういうわけだ胸を張るなこの不法侵入者。いくら近所かつ母親に知られてるからって、だからってそれはないだろう。

「逆にセンパイの気に障ってみました！」

その発言が気に障るっちゅーに。

「ふーーッふッふ！」

「あのなぁ……そろそろ本当に」

「触るんすか！？　熟す前の青い果実を貪るように揉みしだくんすね！？　新雪のように未だ前人未到の頂を、絨毯爆撃のように蹂躙し尽くすんすね！？　ああ、千愛里ちゃんの純潔は如何に！？　次回、黄昏チェリーブロッサム第七話『暁は鮮血に染まる』Ｇｏご期待！？」

何その新番組。ああ、しかも厨二病が悪化かつ活性化している……

というか、それ以上に

「誰が貴様の純潔などいるか！　加えて、『乞うご期待』であって『Ｇｏご期待』じゃない！」

そんなこんなしていると再認識させられる。桜幕千愛里は、やっぱり馬鹿だ。

9．Ｓｉｇｈ．

「はぁ……」

「お突かれさまっす！」

「字が違う」

漢字は大事だ。それぞれに意味がある。

「じゃあお憑かれさまっす！」

何にだよ。ああ、魔女か。しかもどっちも厄介な。

「そういえば肩が重いな……」

「まじっすか！？」

「お前が乗ってるからだけどな」
肩に手を置くだけならまだしも。背中に抱きついて、体重をかけやがって。この後輩め。背中の、重なった部分が暖かい。

「センパイ！？」
「ん？　」
「重いだけっすか？」
そんな事はない。健全な男子高校生が感じるぐらいには、色々と感じている。
でも、コイツは後輩だから。俺が早生まれでコイツが４月生まれだから、誕生日も一ヶ月違いってだけだけれど。
それでもコイツは後輩だから。
「重いだけ、なんすか？」
「……」
「ん」
そう言って、俺の首筋に千愛里の前髪がかかる。
鎖骨に、顔が押し付けられる。
肩に置いていた手にもっと力がこもる。

なんか、吸い取られている気がした。
「じゃあ、今日は帰るっす！」
そうして、潔く帰る宣言をした。

「それじゃあ、また明日」
「また明日っす！」
そう言って。
軽く、俺の、頬に。
キスを、した。

いきなり。
何ってことを。
振り返ってみると、そこにはもう姿も影すらもなく。
背中に体温が少しだけ残っていただけだった。

寝よう。暖かくして、久々にシャワーでなく風呂に入って。なんか、疲れた。突かれた。憑かれてしまった。ああ、間違いなく疲れてるな、寝よう。
顔が赤いし、胸が熱いし、そして頬が火照っているのもそのせいに違いない。
だから、帰ったら即効で床についた。

翌朝。

俺は目覚ましに起こされるのではなく。久々に帰省したアイツに起こされることになった。
「やあ、もう朝だよ。正確に言えば午前七時二十六分だ。起きなくてはヤバイんじゃないかな？」
そう言って布団と枕を取り上げられて。
「おわ、さっむ！」
「下には暖房が、正確にいうとコタツあるから暖かいよ？」
「お前の言い方が冷たいんだ。絶対零度か？」

大人モードの魔女さまほどではないが。

「言葉に温度はないよ。正確に言わずとも」

相変わらず、辛辣なことで。

21to25

胸がもやもやする。胸焼けか？　理由は何だろうか。
飲めないのにブラックのままコーヒーを一気に煽ったからか。
一昨昨日（さきおとといの放課後から週末を利用してゾンビ映画のレイトショーを三劇場ほどハシゴしたからか。
それとも久しぶりにアイツの作った飯を摂取したからか。

あの麻婆豆腐。白いなはずなのに、豆腐ですら真っ赤。
臭いが目に沁みる。陶器製の蓮華なのに、一度よそっただけで真っ赤に染まった。
これおかしいだろ。まだ辛い。三日前に食べたのに。

それとも、オレンジ色に染まった視野の中視界の先。
体育館裏の影の中で、先輩が見知らぬ男子生徒と合っているからか。

理由がわからない。でも。

もう。本当にキツイ。でも恐らく体調が悪いからじゃない。辛いからじゃない。寝不足でも胸焼けでもない。

おそらくは心因性。

ああ……そういえば、一つ気になることがあった。

オレンジ色の生徒会室。僕は彼女が来るまでずっと、太陽を見ていた。その色で瞳が染まるまで、たぶん見ていたんだと思う。

気がつくと、僕は机に向かって座っていて、彼女が何時の間にか目

の前に座っていた。

21．Confessions．

「先輩」

「ん？　なに？」

普段と変わらない、何時もの彼女。その様子は、魔女ではなく彼女（こうめ）。
なんなのだろうか。自分がこんなにも悩んでいるというのに。

そう思うと、無性に、さらにムカムカとしてきた。

「さっきの、告白ですか？」

「こ、ここここ、告白（こくひゃく）！？　も、もしかしてしてくれるの？」

噛まないでください。誰がするか。

「いえ、俺からではなく。ほら、さっき呼び出されていたじゃないですか」

まったく、中身はこんななのに、結構リア充しているじゃないか。
中身はこんななのに。

そう、彼女は見た目は凄くいい。そして、外面(せいとかいのそと)も良い。
いや、素はこっちという保証はないのだが、こっちが素であったなら、それは、その、嬉しいと思う。

「う、うん。クラスメイトの、男子に。で、でも断ったんだよ！？
だから大丈夫！」

何が大丈夫だというのかはわからない。いや、断ったというのがか。
何故か胸のつっかえが降りたような気がするけれど。
無論、まだ辛くは感じているが。

「そうですか」

「う、うん。だから、安心していい、よ。肴菜君の側に私はいる、から」

会話の途中から、僕は彼女の手を握っていた。
彼女はそう言いながら、それを握り返してくれた。

22．Misunderstanding.

「え、えと、今日は記念日だね。握手記念日」

えへへ、というのが本当によく似合う、そんな笑顔。

「手を、単純に握っただけじゃないですか」

「お、乙女（おんなのこ）にはそれでも凄い事なんだよ！？」

大人モードじゃない先輩が語気を強めるほどの事なのか。
それは大事だ。まったくの大事だ。
首から上がテレビのウエディングドレスの女がチェインソウを振り回すぐらいの、すごいことだ。

「俺から手を握ったのが、そんなに嬉しかったんですか？」

少し、からかってみる。すこーし、ね。
だって、もし勘ちが
「うん、それもそうだけど。それ以上に、えっと、嬉しかったのはね」

それ以上に？

「嫌だと思ってくれたんじゃないかなって。　私が、肴菜君以外と仲良くなるのが」

「っ」

そういうわけじゃないんだ。そうじゃないんだ。そう思っても。
息がつまる。喉がヒクついて声が出ない。

「えっとね、ど、独占欲とか、持っていいんだよ？」

違う。それは違う。まったく、全然に。何時もと違って、異常に饒舌な彼女。

おい。やめろ。やめろ。やめろ。

「私は、肴菜君のこと、その」

やめろっ！

「な…にを、何を言っているん、ですか、小梅先輩」

つっかえつっかえになりながら、そう、言うしかなかった。

２３．Ｃｈａｎｇｅｓ．

変わることとってのは、怖いことなのだと「僕」は思う。
気温が変われば人は風邪をひく。
食べ物が変われば人は食欲をなくす。
環境が変わってしまえば、関係が変わってしまえば。
最悪、人は死んでしまう。

二年前。僕の前からアイツはいなくなった。

アイツが決めたことだから、僕には何も言えなかったけれど。

それでも、僕が、俺が変わるには十分すぎた。

進歩なんて、変化なんて、不可避じゃないなら避けるべきなんだ。

変わってしまうことは、とても寒く、痛く、悲しい事なんだ。
とても辛いことなんだ。

だから。だから。

２４．Ａｒｅ　ｙｏｕ　ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ？

「な…かく……ん、肴菜君！」

「え、ああ、はい、なんですか、小梅先輩？」

気がつくと、目の前に先輩がいて、ぼ……俺は壁際にヘタレ込んでいた。

しゃがみ込んで、ハンカチで額の汗を拭いてくれているのはありがたい。でも、擦り過ぎです。額が赤くなっていそうだ。

「だ、大丈夫？」

そんな訳がない。腰も尻も痛いし、床も冷たい。

「とりあえずは。ただ」

「ど、どこか痛むの！？」

「額がこすれて痛いです」

「ご、ごめん！」

「あと、下着が見えています」

それはまあ、スカートでしゃがみこめばそうだろう。

冬服が長めであると言っても、やはりそんな体制でそこは隠すこと

ができないのか。

「す、スパッツだから！　それに、パンツじゃないから恥ずかしくないもん！」

そのセリフをココで言いますか。って、その体制で隠すとバランスが。

「きゃ！」

「あ」

倒れこんできますよね、それは。

25．And after all，I love you.

すごく顔が近い。彼女の瞳に僕の顔が写っている。その中の僕の瞳に、彼女の顔が写っている。

吐息が互いの赤い頬と髪を擽る。彼女の匂いがする。

何故か彼女の息が荒い。

曖昧に動く口元が、言葉を発せないままになっている。

そして、意を決したように真一文字に結ばれた唇が言葉を紡ぐ。

「さ、肴菜君」

震える声。

「なんですか」

「菊盃、肴菜、君」

フルネーム。

「私は、わ、私は」

嫌な予感がした。悪寒がした。先ほどまでの「発作」なんて比べものにならない、そんな。

「芒月小梅は」

後ずさる。にじり寄る。何時の間にか、手が重ねられている。

その手が、握りしめられる。

その手が、引き寄せられる。

「君のことが、好きです」

ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい

ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい

ごめんなさい。

神も仏もない。それでも懺悔に近い、そんな言い訳をしながら、僕は駆け出していた。先輩を押し倒して振り払って。
一度も振り向かずに、先輩を振りきって、何度も躓いて。
全身を引っ掻いて、砂埃と泥とゴミと自分のはいた胃液と涙と鼻血に塗れて。

気がつくと、僕は家の玄関で倒れていた、らしい。
アイツ曰く。「ひどい顔をしていたよ。正確に言うまでもなく」

21to025（後書き）

更新遅れましてすみません……

あ、もしよかったら、感想を頂きたいです。もし、よかったら。

C　10to12

まあ、あんな事があったから、じゃないかもしれないけれど。
アレから理由もなく僕は一週間学校を休んだ。
両方の意味で無責任だと思うと、吐き気がして、また吐いた。
でも、先輩はいっているらしいから大丈夫だろう、きっと。

そんな中、何も言われない方がキツイって解っているから、なのか。
アイツは時たま、小言を言っていた。
「じゃあ、僕は帰るよ。またね。正確に言えば二ヶ月後、かな？
バイバイ」とか何とか言ってアイツは出ていった。
ああ、「帰る」っていうんだな。「戻る」んじゃなくて。そう思うと、更に気が重くなって。

そしてその翌日の今日。

「そろそろ行かないと、正直、唯でさえギリギリな出席日数、やばいんじゃないかな？」
という訳（メール）で。根本的あところでアイツに逆らえない俺は、学校に出ていった。

授業やその他は、いつも通り。そう腫れ物扱（いつもどおり）いだった。

さて、そんな放課後。俺はまたもや躊躇っていた。そりゃそうさ。
どんな顔して会えばいいんだよ。というか会えてたまるかよ。
気丈に振る舞えるわけがない。仮面で隠しても、この間のようにも

う僕はボロを出している。

長い廊下を歩いて生徒会室の前まで来ていたのはもう癖になっていたからか。

扉にかけたてがカタカタとふるえる。そんな季節じゃないのに、汗が出る。

オレンジ色の孤独な世界で、葛藤する俺はどんなに滑稽なんだろうか。

泣きそうなそんな表情が、すりガラスに歪んで移る。

そんな時に、突然引っ張られた。

１０．Ｍｙ ｄｅａｒ ｙｏｕ．

「いっ！」

「あ、痛かったっすか！？」

「ったり前だろうが！」

「フヒヒ、サーセン！」

埃の積もり様からして、やっぱり長いこと使われていないようだ。
そんなソファーに押し倒された。
幸い。スプリングは聞いているようで、背中は痛くない。
身体の上に軽い何かが、冷たく暖かい何かが乗っている。
揺光（オレンジ）を乱反射する中で、それを塗り変えるような最開桜花（フルブロッサム）。

桜幕千愛里がそこにいた。

何時ものような、長い髪を束ね損ねた様な髪で。何時ものように桜色の唇に笑みを浮かべて。何時ものように桜色の瞳に。

俺を映して。

１１．Ａｌｌｅｒｇｙ．

「改めまして、おひさっすセンパイ！」

「おう。ところで桜幕後輩。少し聞きたい事があるんだが？」

「千愛里」

と、呼べと？　先輩ですら名指しじゃないのに、何をいてるんだコイツは。

「呼んでくれないと話さないし答えないっす！」

……ええい、回した腕に力を込めるな暑苦しい。

「千愛里」

「なんすか！？」

さて、スーパー言い訳タイム。
答えないというなら仕方ない。俺は露伴じゃないから、断ってもそれを覆すことが出来るような人間じゃないんだ。
それよりも。

「んどれはなんばしよんじゃコラァァァアアア、あ？」

「答えないとダメっすかね！？」

「答えないとだめっすね」

Ｗｈｙ　ａｎｄ　ｆｏｒ　ｗｈａｔ？
それを聞かない限り、アレルギー持ちの俺をこの埃の伏魔殿に連れ込んだことを許す気はない。
ああもう、鼻が詰まってきた。

「お前、アレルギー性鼻炎持ちにこの環境はキツイんだぞ！」

「知ってるっすよ！　鼻が詰まってきたっすったから！」

お前もかい！

12．Ｉ　ｊｕｓｔ　ｗａｎｎａ．

「たまには歩きながらじゃなくて、座って話がしたかったんすよ！」

「座るどころじゃなくリラックスしてる気がするがな」

二人して寝っ転がってるわけだし。重くはない。寒くもない。柔らかい。決して嫌なわけじゃないんだ。

だからって、この距離感はないんじゃないか。付き合っているわけじゃないのだし。

いやまあ、付き合っているからってこの距離感がいいかといわれれば甘い、甘ったるい、口から砂糖が吐けそうな感じだけれど。

そして少し足りない気がしないでもないけれど。何がとは言わないし、何がかは分からないけれど。

脳裏によぎったのは……

「嫌っすか！？」

「いや、別に」

どちらかと言えば心地良い。何なのだろうかとも思う。だって。

俺は逃げていたはずだ。正面から向かい合いたくなくて。怖くて、痛いのが嫌で、彼女のその気持ちが恐ろしくて。

でも何か起こすわけでもない。単に時間がどうにか解決する迄、落ち込んでいるだけなのだろう。

ああ。最悪だ。そう表も動かない俺は、最悪だ。

「センパイ、どうしたんすか！？」

「いや、なんでもない。なんでも」

いいやつだな、と思う。

こんな俺を心配してくれるなんて。

そして、いつもよりも落ち着いた声で。

「いいんすよ、別に、気にしなくても。私は、先輩が変化しないのがいいって、変わらないほうがいいって思ってるって知ってますから。だから、何もしなくていいんすよ。応えてもらえなくても、私の気持ちは言葉にできなくても」

呼吸が出来なかった。安心感と罪悪感が、虫唾のように込み上げてくる。

「なん、だよ、それ」

俺の胸に埋まっているから、千愛里の顔は見えない。

「センパイ、前言ってたじゃないっすか『変わらないほうがいい』って」

「それは」

「それでいいんじゃないかって、先輩が望むんならそれでいいじゃないかって」

そう言いながら上がった顔は。

「でもそれじゃ切ないから、こうしてるんすよ」

泣いていた。

「鼻炎っす」

さいですか。

C　10to12（後書き）

今回は短めです。すみません。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1347x/

Wicca・Craft

2011年10月19日02時06分発行